

第二章 岩川の地理・歴史・民俗

第一節 地理的・歴史的概要

第二節 民俗の概要



弥五郎銅像と岩川の街（平成 30 年 7 月 26 日）

第二章 岩川の地理・歴史・民俗

第一節 地理的・歴史的概要

一 地理的概要

岩川八幡神社の弥五郎どん祭りが執り行われる鹿児島県曾於市大隅町岩川は、平成十七年七月一日に曾於郡末吉町・財部町・大隅町の三町合併により曾於市となったもので、合併前は、人口約一・三五万人の一自治体として機能していたので、ここでは旧大隅町として記述する。

まず地理的概要として、大隅町は曾於郡のほぼ中央にあり、大隅半島の咽喉部を押さえる位置にあり、国分市（現霧島市）、志布志町（現志布志市）、鹿屋市、宮崎県都城市を結ぶ交通の要衝に当たる。

範囲は北緯三一度四〇分から三一度三一分、東経一三〇度五二分から東経一三〇度三分の間であり、北は福山町（現霧島市）、末吉町に接し、東は松山町（現志布志市）、南は有明町（現志布志市）、大崎町、西は輝北町（現鹿屋市）に接している。

面積は、一四五・五八平方キロメートルと郡内では最も広く、東西二四キロメートル、南北一四キロメートルで、大字は岩川（旧五拾町）・中之内・恒吉（旧長江）・坂元・大谷・須田木・月野・荒谷の八地区に区分されていた。

地形は、総体的には西北から東南へ傾斜しており、西北の高地に端を発する菱田川（上流は佳例川）と岩川で菱田川に合流する前川、月野で菱田川に合流する月野川（上流は長江川）の三川によって台地が分断される。西北部台地と中部台地、南部台地に大別されるが、西北部の大隅北地区（坂元）台地は高い所で標高三六九メートルあり、東南へ次第に低くなり、笠木台地で約一八〇メートルとなる。なお、河川流域では月野の広津田で

約八〇メートルとなる。

年間の平均気温は約十六度で、比較的過ごしやすい地帯である。降水量は、年平均二五〇〇ミリで、多い年で四〇〇〇ミリを越す年もある。

台風は常襲地帯と思われているが、直撃を受ける確率はそれほど高くない。直撃されても内陸部のため、上陸時点の勢力より相当相殺されるものの、時期によっては稲や園芸作物への被害は免れない。迫谷の多い町内では、寧ろ台風や長雨によってもたらされる水害による崩壊や流出の方が憂慮される。近年では、平成二十八年九月の台風十六号による、江戸時代後期の石橋「恒吉太鼓橋（当時は市指定）」や大正期の石橋「小山橋」「宮田橋」の崩落等の文化財被害があげられる。

町内の地層は位置によって若干の差はあるが、大別すると、表土の下に西北部では桜島の文明噴火の軽石層があり、その下に黒色の腐植土層があるが、このあたりに縄文晩期や弥生の土器類などが出土する。その下には、主として桜島の噴出物が層を成しているが、北部では御池火山灰の薄い層も見られる。アカホヤと呼ばれる層は鬼界カルデラ（約七千三百年前）で編年の目安となる層である。その下には桜島噴火に伴う層が幾重にもあり、桜島誕生頃を示すというP14（一・三万年前）は町内全域で見られる。さらに下部に層があり、シラス層に達する。シラス層は、始良カルデラ（約二・九万年前）が出来た時の噴出物（入戸火砕流堆積物）で厚く堆積している。シラス層の下に砂礫や凝灰岩があるが、ここまでは始良カルデラの噴出物である。凝灰岩は半溶結状態で柔らかく、河川の流れによって削られるから、各所に奇岩や景勝地が生まれる。月野川の大鳥峡の甌穴や小山の加木掛（カンカケ）の河岸の浸食岩などもその類である。なお、坂元の前川流域では、シラス層の下に日南層群があるが、中須田木の月野川流域などにもそれは見られる。

このような地勢は、谷に水田が台地に畑が展開し、農業・畜産業への発達につながり、古来、馬の産地として名高かった当町は、現在は肉用牛や豚・鶏などの供給基地として、また、白菜やスイカの産地として発展している。

二 歴史的概要

ここでは大隅町の大字岩川（五拾町）及び中之内を中心に掲げる。

旧石器時代の出土例は少ないが、縄文時代の遺跡は、各時期、多くの遺跡が発見されている。

特筆すべきは、大隅町岩川に位置する定塚遺跡である。当遺跡は、平成十五年度から同十七年度にかけて、東九州自動車道（曾於弥五郎IC〈末吉財部IC〉）の建設に伴い発掘調査が実施され、旧石器時代の石器群や縄文時代の遺構・遺物が大量に発見されている。なかでも、早期前葉の集落跡からは、九十七軒の竪穴住居状遺構や土坑、集石等が発見され、当時、この地域に極めて安定した社会が形成されていたことを窺わせている。弥生時代・古墳時代の遺跡は少ない。古代は、大隅町岩川の西之蘭遺跡や大隅町中之内の濱田遺跡やノトロ遺跡が挙げられ、掘立柱建物跡とされる遺構や堀状遺構が検出され、また墨書土器や焼塩土器も出土している。

鎌倉時代、大隅町は大隅国の深川院・小河院や日向国の救仁院に含まれ、ほとんどは島津庄に属していた。惟宗忠久の島津庄入国以降は、島津氏が薩隅日三州の守護（比企の変に連座して一時期守護職を失っているが）を代々務めている。

大隅町は落人伝説の多い所で、鎌倉時代末期の武将平景清の墓（柳井谷石塔群）とされる墓石が、中之内柳井谷にある。しかし、これはあく

までも伝説で、実際は、地元の豪族岩川氏の墓石と考えられている。岩川氏は、元々は平姓肥後氏の一族で、名越氏（北条朝時を始祖）の被官であり、大隅国において地頭代官職に補せられ下向し、地元の地名岩川（岩河）を名乗ったと考えられている。岩川氏は、中之内に位置する手取城を拠点に活動していたが、正平十三年の末吉国合原の戦いで、島津氏久は人吉相良氏に大敗するが、この際、岩川氏は島津氏に味方しなかつたとして氏久に攻められ、佐多経由で種子島に渡り、更に屋久島にも逃げ移っている。

なお、正平十一年（一三五〇）の足利義詮安堵下文（島津家文書）の中に、岩河村の名が見えるのが、現時点での初見とされる。なお、岩川の地名の由来は、岩を削って流れる河川の状態からの命名と考えられている。

室町時代は、大隅町内も戦乱の渦に巻き込まれ、高山の肝付氏・都城の北郷氏・志布志の新納氏などの諸勢力が入り乱れている。大隅町内だけでなく、恒吉城・手取城・岩川城・新城・月野城の他、戦記等に記されていない城や砦を含めると、五十前後であるとされる。

この頃、岩川は末吉郷に属し、中之内村・五拾町村・岩崎村を総称して岩川といった。また当時、末吉郷岩崎村に鎮座していた岩川（岩河）八幡神社には、天文四年（一五三五）の棟札があったと記録にあるが現存していない。

戦国末期になると、島津氏の重臣伊集院氏が都城周辺を所領とし、大隅町も伊集院氏の支配するところとなる。慶長四年（一五九九）三月、伊集院幸侃（忠棟）は伏見で島津忠恒により誅されたことにより、息子忠真は勝負を度外視して本家に対し反旗を翻す。いわゆる庄内の乱である。忠真は居城都之城を中心に、都城十二外城を構築し、大隅町では恒吉城がこれに含まれる。忠真は、島津氏の猛攻をよく凌いでいたが、徳

川家康の仲介もあり、翌年三月に降伏し、都城一円は再び北郷氏が復帰することとなる。

江戸時代(藩政時代)、大隅町は、末吉郷、恒吉郷、志布志郷に大別される。このうち、大隅町岩川(五拾町村・中之内村)は島津氏の重臣伊勢家の私領となるが、末吉郷にも所属していた。よって伊勢家中(私領の武士)は、末吉地頭の命にも従わなければならないという二重の支配下にあり、かつ島津直属の末吉郷士からは見下されるといふ苦しい立ち位置にあった。

慶応四年(一八六八)の戊辰戦争では、伊勢家臣団により「岩川私領五番隊」が編成される。私領五番隊は、山形県庄内地方の関川の戦いで軍功が認められ、明治二年(一八六九)九月二十五日、五拾町村・中之内村の二村を岩川郷としての独立が認められた。岩川の隊士達は、現在の中園・馬場の地域を麓(岩川八幡神社の麓に伊勢家の仮屋を設置)に指定し、鹿児島や谷山・国分・志布志などから仲間達が集い、居住した。これが岩川郷の始まりである。

なおこの頃の岩川八幡神社は荒廃していたようだが、延宝二年(一六七四)、鳩嶺山瑞川寺(岩川八幡神社の別当寺)の僧快宥が石清水八幡宮に参詣し、御神体四面(銅鏡)を持ち帰り、同社の復興に尽力しており、天保十四年(一八四三)の『三国名勝図会』によると、同社の祭りとして大人弥五郎の人形行事が定着していたことがうかがえる。

明治十年(一八七七)の西南戦争の時には、曾於市内の各地が戦場となり、大隅町岩川の官軍墓地がその名残を今に伝える。同二十一年(一八八八)町村制公布により、岩川郷は岩川村と改称、従来の村は大字となった。

大正三年(一九一四)、末吉村岩崎に鎮座していた岩川八幡神社は度重なる水害で祭祀不便という理由から、岩川村岩川(現在地で、元は熊野

神社が鎮座していた)へ遷座された。これに伴い、かつての神社の隣で弥五郎どんの着物の製作も、縫之園集落(現吉井集落)から、岩川麓の馬場集落及び東馬場集落に移管されることとなった。

大正十三年(一九二四)、岩川村から岩川町となり、同時期に国鉄志布志線の岩川駅も開通し、街も駅を中心に発展していった。

昭和三十年(一九五五)の町村合併で大隅町と改称され、大字五拾町は、大字岩川となった。

大隅町発足後、岩川はその中心地となり、国や県・町の機関が集中し、行政機能の出先が昔から置かれ、地形的にも宿場町風の街並みとなっていた。

なお、同町は地元に残る伝統行事「弥五郎どん」を、町おこしの一つとして活用していく。道の駅弥五郎伝説の里の建設及び園内に高さ十五・八メートルの弥五郎どんの巨大銅像(当時、人物像としては国内一の大きさ)を設置し、大隅町のシンボルとなっている。また、各種看板や信号機、橋の欄干等に反映させたり、お菓子や野菜、加工品、弥五郎面やキーホルダー、Tシャツ等の数えきれない程の弥五郎関連グッズ、子弥五郎や孫弥五郎、やごじい(ゆるキャラ)、高速道路の曾於弥五郎インターチェンジ、弥五郎大学講座、弥五郎サミット(岩川小学校と山之口の富吉小学校との交流会)、弥五郎塾、やごろつ娘等の各種行事・団体名など様々な場面に「弥五郎」の名を冠する等、弥五郎どんの町として発展していった。

また、弥五郎どんは町のPRのため全国各地へ出張している。昭和四十五年(一九七〇)には大阪万博や、大阪御堂筋パレード(平成期に五回出場)や北海道旭川市等に参加、平成四年(一九九二)にはスペインバルセロナでの世界巨人博覧会にも参加している。このように弥五郎どんは、国内だけではなく世界にも情報発信を行っている。

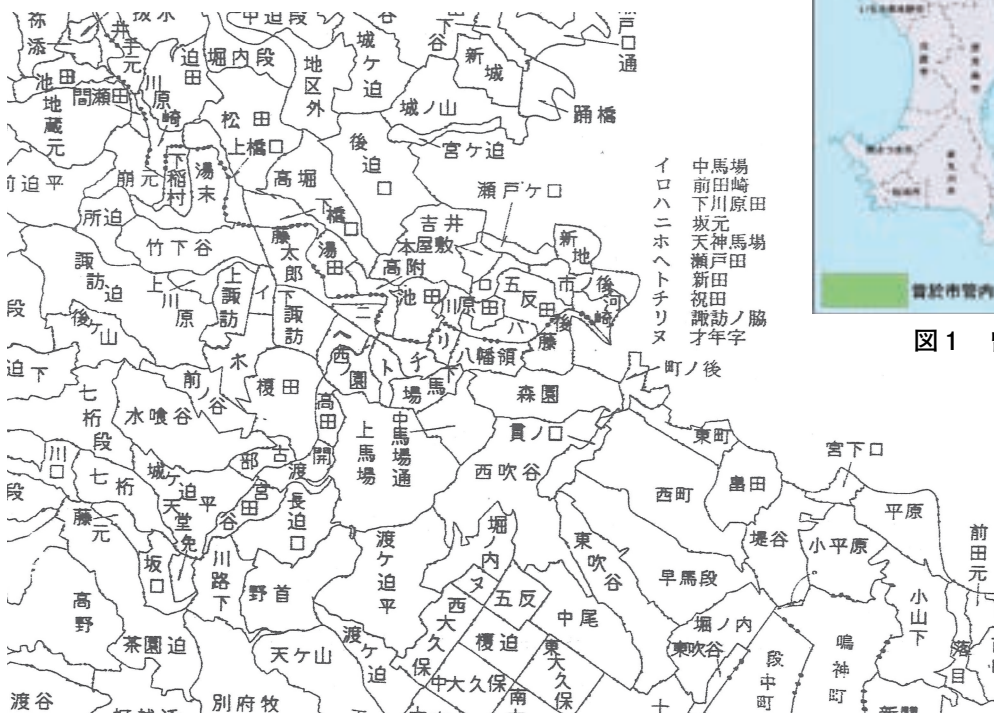


図2 岩川八幡神社周辺の小字図 (旧大隅町の部分のみ表示)



図1 曾於市の位置

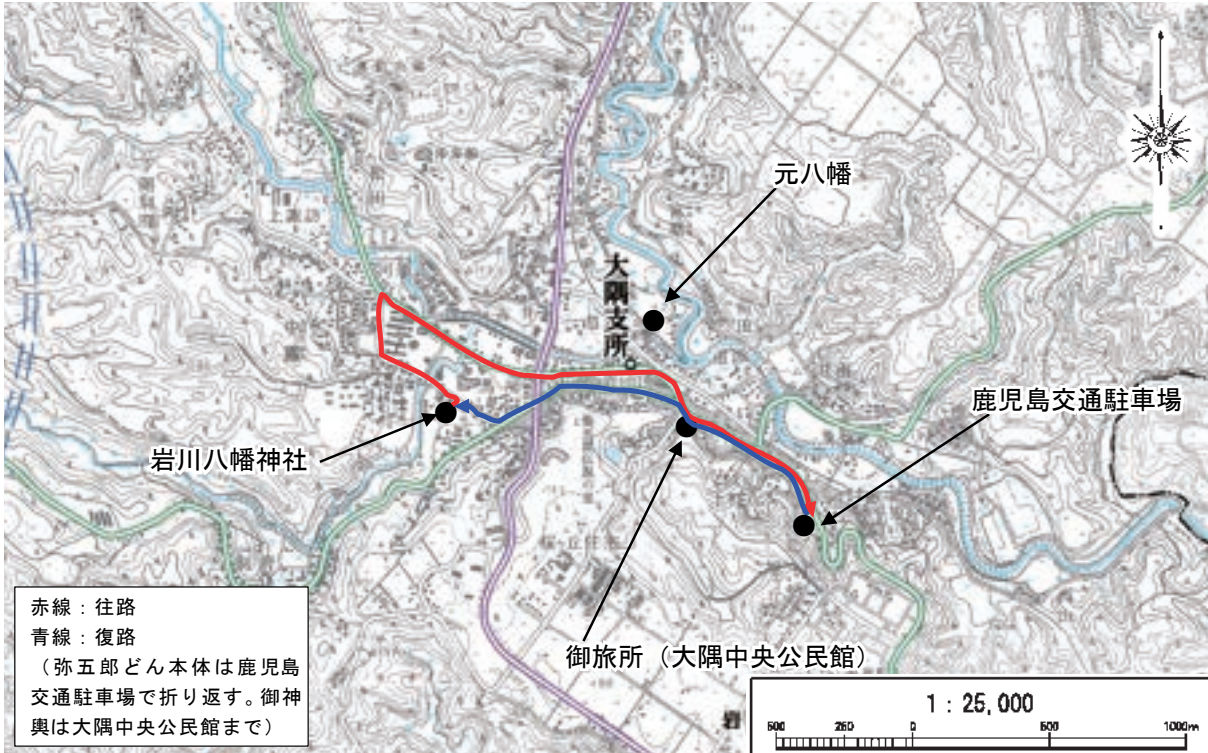


図3 岩川八幡神社周辺地図及び浜下り巡行ルート

第二節 民俗の概要

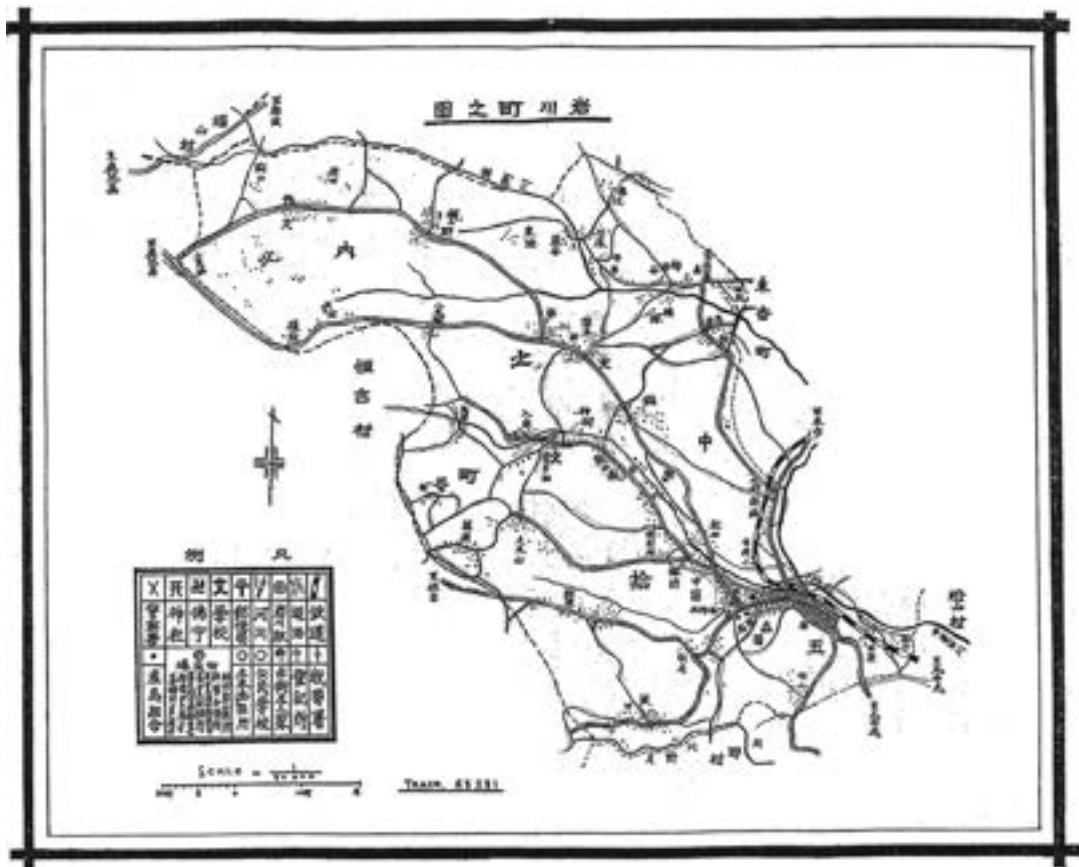
古来より当地域において伝承されてきた風俗・習慣は様々なものがあるが、現代社会において、ほとんどのものが消滅あるいは簡素化・簡略化されてきている。ここでは、大隅町内の年中行事の中で、弥五郎どん祭りをはじめ、特に特色あるものを中心に取り上げることとしたい。

岩川八幡神社の弥五郎どん祭り（昭和六十三年三月二十三日鹿児島県指定無形民俗文化財）は、毎年十一月三日から五日にかけて行われており、五日は岩川の豊祭（ホゼ・ホウザイ・方祭とも）の日でもある。

なお、現在の岩川八幡神社の氏子は、明治初期に建設された岩川郷（五拾町村・中之内村）の範囲とほぼ重なり、昭和九年（一九三四）の岩川町の地図（下図）が参考になるので、ここに掲げる。

弥五郎どん祭りは、一般的には五穀豊穣を祈願した祭りであり、九百年以上の伝統があると伝えられており、県下三大祭りの一つ（いつ頃から言うようになったか不明だが諸説あり。当地域では、志布志のお釈迦祭りや隼人の初午祭りの三つというが、他地域に行くと、薩摩川内大綱引きやおはら祭りが含まれる場合もあり、一概にはいえない）とされている。弥五郎どんは、神幸の先駆露払い、すなわち先導者を現したもので、身長は一丈六尺（四・八五^寸）の竹籠製で、二十五反もある梅染めの着物、腰には長さ一丈四尺（四・二四^寸）の大刀、九尺四寸（二・八五^寸）の小刀を帯び、手に一丈八尺（五・四^寸余）の鉾（笏の説もあり）を持ち、風貌猛々しい姿である。また、四年に一度の閏年に、衣替え（竹籠本体及び着物の更新）が行われている。

三日の午前一時のふれ太鼓を合図に、同二時頃から組立てはじめ、同四時に弥五郎どん起こし、同七時頃に完成する。午前十時頃に神事（昔は本殿祭といった）や弥五郎太鼓奉納が行われ、午後一時から浜下りが行われ



岩川町之図（昭和9年）

る。浜下りでは、弥五郎どんは御神体（神輿）の先払いを務め、市内を巡行し地域内を清める。御旅所となる大隅中央公民館での神事を経て、午後三時半時過ぎに再び神社に戻る。この日は武道大会や出店、ミスター弥五郎や踊り連等による市中パレードもあり、多いときには約十万人もの人出で賑わう。

弥五郎どんが何者なのかについては、様々な説がありはつきりしない。

大きく二つの説に大別され、朝廷に反抗した隼人族の首領とも、朝廷側の武内宿禰とも言われている。武内宿禰は、仲哀天皇・神宮皇后・応神天皇とともに岩川八幡神社の祭神の一人で、岩川八幡神社では、天皇家に仕えた武内宿禰が先導を務めているとの説を採っている。

他方、養老四年（七二〇）の隼人の反乱の時、大隅国司陽侯麻呂が殺害されるが、この時の首領が大人弥五郎と呼ばれる人物だったとも伝えられている。そしてこの時、隼人の戦死者があまりにも多かつたことから、慰霊のための放生会を行っており、これが岩川八幡神社の秋祭りの起源とも考えられている。また、「五郎」＝「御霊」とし、数多の隼人族の霊そのものが、弥五郎だとする説もある。

また、祭り自体がいつ頃から行われていたのかについても、不明な点が多く、江戸時代以前については、はつきりとはしない。

記録としてはつきり登場するのは、現在のところ、寛政七年（一七九五）に白尾国柱が編纂した『麿藩名勝考』で、大人弥五郎の人形の記述が見受けられる。また、安永六年（一七七七）の『五拾町村・中之内村山野見懸日帳（山口文書）』には「十月五日 今日、祭礼にて、見懸方休み」とあり、弥五郎とは明記されていないが、弥五郎どん祭りの記述と思われる。

弥五郎どんの姿が映る写真として一般的に知られているのは、大正十三年（一九一四）のさわ写真館所蔵（一九二ページ参照）のものである。なお、

同五年（一九一六）十一月五日付けの鹿児島新聞社の記事には、同館が撮影した弥五郎どんが掲載されており、現時点では、弥五郎どんの姿が記録された最も古い写真（左図）となる。



最古の弥五郎どん写真
(澤写真館撮影・大正5年11月5日付
鹿児島新聞より転載)

弥五郎どん祭りは、江戸時代は旧暦十月五日の開催であったが、大正時代には十一月五日になっている。いつ変更したかは、記録では確認出来ないが、西南戦争終結後に変更されたとの説もある。祭りは、基本的には毎年開催しているとされ、太平洋戦争終戦時も実施されている。終戦後、米軍の政策により、腰に刀を差していない時（昭和二十一～二十五）もあった。昭和以降の記録上、祭りが中止になったのは、昭和天皇の御病気に配慮しての昭和六十三年（一九八八）と、新型コロナウイルスの影響による令和二・三年の合計三回である。しかし、いずれも巡行自体は中止しているが、弥五郎本体の組立（衣替えの年は製作も含む）及び神事だけは欠かさず実施している。

昭和初期、祭りは地元が馬場・中園青年団の後援のもと開催していたが、戦後まもなく馬場の氏子青年団が主体となり、同二十八年に岩川町商工会（任意組合）が発足し、祭りの協賛行事を仕切るようになっていった。岩

川駅近くに浜下りの御旅所（これまで岩川小学校校庭が御旅所）が設置され、岩川駅周辺から神社までは、商店や露天商が開かれ賑やかとなっていた。また六日に武道大会や、素人相撲大会、のど自慢、郷土舞踊等も催されるようになり、祭りの規模も大きくなっていった。規模拡大に伴い、麓（馬場・森園集落）青壮年会へ拡大し、大隅町商工会と共同で開催していたが、同四十一年（一九六六）から大隅町商工会青年部に祭りの母体が引き継がれ、現在へと至る組織の根源となっている。なお発足時期は不明だが、大隅町商工会内部に、弥五郎どん祭り奉賛会が設置（当時の祭り実行委員長は、商工会の事業部長が兼ねていた）され、やがて弥五郎どん祭り保存会へと名称を変え、平成二十二年からは現在の弥五郎どん保存会及びそれを実際に運営する弥五郎どん祭り実行委員会へと変遷している。

商工会は、祭りの更なる発展を期待して神社側との協議を重ね、昭和四十八年（一九七三）から十一月三日（文化の日）～五日の開催に変更され、現在の祭りの形態の地下が出来上がった。三日に弥五郎どん祭りのメインイベントである浜下り、五日に例大祭（秋祭り）を執行するようになったが、現在のように定着するまでは、細かい変化があった。例えば、三日は組立のみで、四日に浜下りを実施したり、三日の浜下り後、御旅所に宿泊し、四日に弥五郎どんと一緒に市中パレードを実施したりしている。浜下りの開始時間も、午前十時や午後一時から開始する等の変化があるが、弥五郎どんが先導を務め、宮仕と呼ばれる人達が、威儀物及び御神体を取り扱うという基本的な形式は変わらない。ふれ太鼓にしても、昭和五十～六十年代は子ども達も真夜中から参加していた時もあった。筆者は岩川出身であるが、弥五郎どん祭り当日の夜だけは、子ども達同士での行動も可であり、特別な夜として浮き浮きしていたものであった。昭和五十九年（一九八四）には、祭りの巡行コース上に岩川高架橋（国道二六九号線のバイパス道路）

が完成。高架橋に弥五郎どんの頭部が当たる事態となったが、本体を斜めに倒して通過、その様子を当時は「リンボーダンス」、今は「イナバウアー」と称し、現在では浜下りと同じくらい拍手喝采を浴びるようになった事例もあるが、原則、祭りの本質は変えないよう配慮しつつ、その時代時代の状況に応じて試行錯誤しながら、少しずつ祭りの形態が変化してきている。また、岩川駅を中心とした街の発展や、商工会が深く関わるようになってから、武道大会や芸能文化の種目数も徐々に増加、これらに関わる人も増加し、祭りの規模も拡大していったようである。

平成十二年（二〇〇〇）からは、ほぼ現在の行程（表1）で固定化している。また、平成二年（一九九〇）から、前日には「どんどん祭り」と称して前夜祭も行われている。

11月3日の弥五郎どん祭りの流れ（令和4年）	
午前1時～	ふれ太鼓（神事） 「弥五郎どんが起きっど～」とふれて回る。
午前1時半頃	起こし太鼓（神事） 神事後、社殿の中で弥五郎どんの組立てを行う。 竹製。
午前4時～	弥五郎どん起こし 台車に載せ皆で引っ張って起こす。これに参加すると身体が強壮になり、運氣益々めでたくなると言う。
午前7時頃	完成 袴をはかせ、腰にさらしを幾重にも巻き、大小の刀や小道具を備える。 完成後、弥五郎太鼓の奉納あり。
午前9時半～	神幸祭（巫女舞含む） 神事後に弥五郎太鼓の奉納あり
午後1時～	浜下り 祭りのメインイベント。子供たちの手によって町内を練り歩く。
午後2時頃	御旅所（大隅中央公民館） 御神輿の休憩所。神事（巫女舞含む）を行う。
午後3時半頃	八幡神社へ 御旅所後、一旦、旧岩川小校庭へ行った後、神社へ。 4日・5日は弥五郎どんは境内にて鎮座。
※ 11月5日は10時から例大祭（ホセ祭り） 15時から弥五郎どんを解体	

表1 近年の祭りの流れ

なお、昭和六十三年三月二十三日付けで鹿児島県無形民俗文化財に指定され、平成三十一年三月二十八日付けで記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財となっている。

また、岩川の他にも弥五郎の名を冠した大人人形行事がある。それは、都城市山之口町にある野正八幡宮の弥五郎どんと、日南市飢肥の田ノ上八幡神社の弥五郎様である。野八幡宮の弥五郎どんは、身長四トイ、顔は赤く、黒髭をたくわえ、麻布の着物に、大小の刀を差し、頭部に鉾を付けている。祭りは、岩川と同じで毎年十一月三日に行われている。田ノ上八幡神社の弥五郎様は、稲積いなづみ弥五郎とも呼ばれ、身長七トイ、山伏のような姿をしている。巨大なため、現在は引くことが出来ないが、毎年十一月中旬の御神幸の際に、その姿を現す。また他に湧水町の勝栗神社には弥五郎面があり、面の裏には大和朝廷に関する墨書がある。その他、日置市日吉町に大王殿おびんというのがあるが、これも弥五郎どんの同系ではないかと考えられている。

その他の民俗行事として、大隅町内各地では、毎年正月七日の夕方に、鬼火焚きが行われている。悪魔を追い払い家を守ってくれる鬼を迎える行事といわれ、大隅町の岩川・笠木・梶ヶ野かじがの・柳井谷やないだでは、「おねっこ」、恒吉では「おねっこたつ」とも呼ばれ、生竹を中心にして、周囲に薪を積んだりして火を焚く行事であるが、後世、鬼を追い払う意に変化しているところが多い。高齢化により数の減少はあるが、現在も正月七日前後に、各地で実施されている。

正月十四日には、「もぐらうつ（もぐらもつ）」が行われている。竹竿の先に藁わら苞たもとを結び付け、子ども達が地面を叩きながら各戸を廻り、もぐらが農作物を荒らさないように豊作を祈願する小正月行事である。現在市内で実施されているのは、末吉町南之郷の久保集落のみであるが、か

つては、笠木・柳井谷で行われていた。

正・五・九月の十六日は、山やま神かみ祭りである。これは、山地の農民の講で、この日は山の仕事をしないで休む日であり、山に行くとは怪我をするという。炭火焼、木挽こびきき、大工など職場集団では、親方の家に集まり、山の神に酒をあげて宴に入る。現在も山に関係する仕事に携わる者は、山ノ神祭りかみと称して、共に飲食を行っている。また、町内の六割は山で構成されているが、市内各地に、山の神として石祠や大木、自然石が祀られている。

田植えの時期には「さのぼい」が行われる。昔は、各集落で期日を定めていたところが多かった。この日は、皆仕事を休んで、各家でだんごを作ったり焼酎を飲んだりしていた。皆で集まって飲み食いをすることはほとんどない。今は聞かないが、昔は粟植えさのぼいもよく行われていた。梶ヶ野では、二才衆が皆揃って、豊作を祈願するため岩川八幡神社に参詣していた。この時、家族の数に人間一人に五円くらい掛け、牛馬各頭にもいくらかお金をかけて、御賽銭や飲み代にしたりしていた。

七夕は旧暦に倣なまつて、八月七日に行われる。竿竹を作る慣わしがあり、家族一人に一本ずつ作った。墓の花立も新しい竹で作られ、墓石の苔を落としたりしており、こうした行事は六日までに済ませるところもあった。現在の七夕は、こうした風習もほぼ無くなり、一般的な竹に短冊を吊り下げ、願い事を祈願するタイプのものが多い。

昔は、七夕を起源とし、お盆におせろさあ（精霊さま）を迎える。七日にあの世に旅立って、十三日の夕方、墓地を経て家に到着されるといい、当日は家の門口で迎え火を行う。しかし、地域によっては、末吉町二之方の新地集落のように七日から迎え火を行うところや、梶ヶ野のように迎え火を行わない集落もある。

旧暦八月十五日は十五夜である。庭に白を出して箕をのせ、萩やススキや栗の枝などを花瓶にさして、里芋や団子も供える。また、十五夜では綱引きや相撲も恒例の行事であった。綱引きは、かずらを芯にして、各家で持ち寄った藁で、綱を練り上げて行った。地域によって異なるが、綱引きの終わった藁は持ち帰ったり、相撲の土俵に使用したりしていた。十五夜の綱は水神の竜であり、竜神のお陰で水も豊富にあり、豊作となったので、竜神に感謝し、これを送る行事であったが、これが綱引きに転化していったのではないかともいわれている。綱を作り終えて、とぐろを巻いたように積み上げ祀る時、末吉町の光神では、子ども達が綱の先端に茄子などの野菜で竜の眼を付けてやるものであった。

昔は、各集落単位で十五夜行事が行われており、昭和五十年代は、筆者が住んでいた上諏訪集落でも、個人宅敷地内に土俵が築かれ相撲や綱引きが実施され大層賑わっていたが、令和の現在、集落単位はいうまでもなく、地区（校区）単位でみても、十五夜に綱引きや相撲大会を実施しているところは聞かなくなった。

豊祭は、昔は「方祭（ホゼ・ホウザイ）」とも表記される。昭和期の澤實一日記（二〇八ページ）や大隅町誌（昭和四十四年刊）等に「方祭」という表現が見受けられるが、現在はほぼ使われなくなった。元々は、方限（薩摩藩独自の地域区割）単位での祭りを意味しているとか、放生会（ほうじょう）がなまってホゼになったともいう。放生会は捕らえられた生物を放つ行事で、農作業で殺した生物たちを、収穫の終わるのを待って供養することである。

恒吉は新暦十月十五日に投谷八幡宮の秋祭りに豊祭（王子神幸祭）を行う。月野は、十一月三日の太田神社秋祭りが豊祭、岩川は十一月五日が豊祭である。岩川では昔は「じゅがついつか」と言っていたが、旧暦

十月五日をそのまま新暦に持つてくると収穫期より早いので、十一月にしたものである。坂元の蹲踞神社は、十月十九日に豊祭であったが、その後、十一月三日となり、町村合併後は、弥五郎どん祭りに合わせて十一月五日となった。

豊祭には、甘酒とコンニャクを作る。甘酒は、昔は餅米を飯に炊いて麴を入れ、長い時間ませ合わせて作ったものであるが、その後、長持ちさせるため、餅に搗いて麴とつきませる方法になった。コンニャクは、庭の畑や茶園の下で育てたコンニャク芋を「たかおろし」ですりおろしたのを適当の大きさに平たく丸めたり、型にはめ角にしたりして灰汁の中で煮て作った。

豊祭の日は、親戚の家に行くものであるが、「ホゼイトコ」と言つて、知人の家など遠慮なく上がり込んで御馳走になり、「マンカン飯（赤飯）」とコンニャクを竹の皮で包んだ土産を貰って帰るものであった。

他にも、信仰上の目的達成のため、集まって作る集団を講というが、日待ち講・月待ち講・庚申講・観音講・伊勢講・霧島講など様々な講が年中行事として市内各地に残っていた。しかし近年、そのほとんどが高齢化・少子化等の理由で、解散や自然消滅している。